



’組織化された混沌’ ということ

中部電力株式会社 取締役 技術開発本部長 藍田 正和

2, 3年前と思うが、日本経済新聞の「私の履歴書」に江崎玲於奈氏が取り上げられており、何回目かの記事の中で、’組織化された混沌’という言葉が目をついた。素晴らしい発明や発見が生まれるのはどのような環境か？ということを書いておられた訳であるが、’組織化された混沌’とは、自由奔放な個人活動を組織全体としてマネジメントされていることと氏は述べていた。

江崎玲於奈氏の「私の履歴書」を読んだ当時、企業の社会的責任ということがクローズアップされる中で、業務品質の向上という、より一層の職場規律が求められる一方、如何に職場の活性化、すなわち、一人ひとりが自由な職場環境で仕事をし、業務の生産性を向上させるにはどうすべきかということが課題となってきたため、今もって記憶に留めていた訳である。

研究開発に関する組織論としてノーベル賞受賞者の言ならではの説得力のある表現と感じたのであるが、改めて考えてみると、こうした組織論は、ままた見られる。

現実のことではないが、大ヒットした映画で「踊る大捜査線 レインボーブリッジを封鎖せよ！」というのがあった。その中で、犯罪者グループが捜査にあたる警察組織をあざ笑うというシーンが出てくる。犯罪者グループは、特定のリーダーを持たず、各人の自由意志で共通の目的のみにより行動するというものであったが、集団の活動がトップの統制の下で組織的に展開されるということを前提としていては、こうした犯人の行動を推理し捕まえることはできないという、犯罪者達の警察組織への挑戦というシナリオで作られていた。

また、ちょっと性格が違うが、緩やかな統制の中で不特定な参加者によって構築されているシステムもある。最近あまり話題とならないが、計算機のオペレーティングシステムである’リナックス’というプログラムは、市場を席卷していたウィンドウズに変わるものとして注目され、多くの参加者が自由に改良を加えることによりシステム全体を作りあげるといえるものである。さらに、日頃、検索サイトから情報を得るのに大変重宝している’ウィキペディア (wikipedia)’というのは、オンライン百科事典と呼ばれるもので、コピーレフト (copyleft) で、いわゆる著作権 (copyright) に対する考え方) なライセンスの下、誰でも無料で自由に編集に参加できるというものである。これらは、今日のような複雑で情報通信機能が発達した社会において、多様な要求を満たすシステムを構築したり、

膨大な情報を纏めていくために、特定の監修者による限界を克服するものとして生まれてきたものである。

企業における技術開発においては、現実的で着実な成果か、イノベーションをもたらす基礎的な成果の追求かは、組織運用の統制と自由に関わる課題である。当社における技術開発を統括するものとして、研究員の自由な活動を促しつつ、組織としてマネジメントするという‘組織化された混沌’は理想であり、現実としては、極めて困難なことではあるが、常に、このことを意識しながら、技術開発本部としての成果を出していきたいと考えている。

余談ではあるが、本稿を執筆している今、デンマークで地球温暖化対策に対するCOP15が開催されている。我が国においても、低炭素社会に向けて太陽光発電を始めとした自然エネルギーの大量導入や電気自動車へのシフトが現実となりつつあるが、電気事業にとっては、制御不能で自由奔放な電源が大規模に系統連携されるという、これまでに経験のない構造変化の時代を迎えている。スマートグリッドなる新たな系統運用システムが求められているが、まさに、‘組織化された混沌’ということであろうか？